734

特249
426

# 抗日支那を結局軍部はどう始末するか

會々員
文三著

10 SEN

1

*0010159000*

0010159-000

特２４９－４２６

支那の排日を軍部は何うするか

上村文三・著

教材社

昭和１１

ABJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２日
けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

特249
426

上村文三著

# 支那の排日を軍部は何うするか

東京 教材社 發行

# 目次


一、第二の滿洲事變直前……一
二、淵源深き排日運動……七
三、蔣の二重外交……一三
四、赤化と抗日の合作……一九
五、英國の裏面策動……二五
六、暗躍する列强の魔手……三〇
七、北支を操る蔣介石……三三
八、排日一掃へ……三八

# 支那の排日を軍部は何うするか

上村文三

## 一、第二の滿洲事變直前

漫々的の支那人と氣の短い日本人。性來大陸的の支那人を相手にするには日本人はよろしく氣を永く持たねばならないと云はれるけれども、何うして近來は、支那人の方がよほど氣が短い。針鼠の如くとんがらかつてからは、日本人とさへ見れば目の敵にし、打倒日本、抗日救國でいきり立つてゐる。今度の成都事件における殘虐ぶりは何うであらう。鬼畜も三舍をさける亂暴狼籍、正氣の沙汰とは思へぬ暴行ぶりである。最近上海に中山事件あり萱生事件あり、その血痕も未だ乾かぬうちに今度の成都事件となつたのである。佛の

顏も三度とやら、今度こそ日本がとんがらかる番となり、勃然として怒氣心頭に發したとしても不思議はあるまい。昭和六年九月十八日、柳條溝の一發が滿洲事變の導火線となり、張學良政權の掃蕩となるまでは、それに先行する無數の排日侮日事件があり、日露戰爭の成果たる日本の滿洲に於ける地位は蹂躙され、日本人をして切齒扼腕せしめることの久しいものがあつたのである。日本人は氣が短いどころか、世界にも稀れな辛抱づよい國民である。滅多なことでは皇軍は動かない。たゞ、ひと度び立つと決れば電光石火、耳を蔽ふ暇あらしめないのが特徴だ。

成都事件は支那の山奥といふべき四川省成都に起つた事事である。南京政府はこれを地方的問題として、地方官憲の折衝で片づけやうとした。併し日本は斷じて之を斥け、中央問題として、中央政府の責任を追窮し、拔本塞源的の解決を要求することゝなつたのである。それは何故かと云へば、此事件は國民政府の下全支に煽揚せられつゝある抗日排日運動の一所產に他ならないからだ。此事件を地方的問題として片づけ、責任者及び犯人の處罰被害者に對する損害の賠償、公式陳謝、將來の保障といつた外交紋切り型で事務的に解決するに滿足するならば、第二第三の成都事件は今後踵を接して頻出することは明瞭だ。將來の保障は一片の約束だけでは駄目である。支那のやうな國では、一片の公文書の如きは鼻紙ほどの値打ちもない。成都事件を機會として、拔本塞源の方策を講じ日支關係の正道を打開すべく、排日抗日團體の全面的解散、國民黨部の對日態度の根本的修正、その他排日運動を誘致する如き雜誌、新聞の發行禁止、小、中學校教科書の改訂、排日宣傳のビラの一掃を南京政府に要求し、以上に關して南京政府が實行を怠つた場合生じた一切の問題に關しては總べて南京政府が責任を負ふことの方針に日本外務軍部の意見一致し、廟議一決、川越大使への訓電が飛ぶこととなつたのは全く當然のことである。

今回の成都事件に同僚を殺され、弔ひ合戰の意氣込で現地調査に急行した『大每』の田知花記者の九月一日成都發報告には、左の如き戰慄すべき事實が述べられてある。

「今回の事件において記者を驚倒させた事は暴徒の大半が最も純眞なるべき中學生であつたことである。世相を知らず常識もないこれら若輩が殆ど狂的に血氣を變へ群をなして一行に飛びかゝつて行つた光景は想像して見ても戰慄させられるではないか。いな中學生

のみではなかつた、幾百の女學生も小學生もその中に混じつてゐたといふことだ。遭難者は足腰たゝぬ打擊を受けたのち四尺にも足らぬ小學生に幾度か撲りつけられたと言つてゐる。棍棒をもつて足を拂つた女學生もあつたといふ。記者は暴動の跡生々しい成都市街を護衛をつけて視察したところ霜降りの洋服黑ゲートルに學生帽といふ日本の中學生と全く變らぬ學生を見たが、日本人と見ればけはしい敵愾心に滿ちた目付きで射すくめるやうに睨むかれらは護衛がなかつたら恐らく飛びついて來たかも知れない。また慘殺のあつた驟馬市街の路上で記者の背後にあつた支那人の腕に抱えられてゐる三、四才の兒童がその小さな手に棒切れを握つて廻らぬ舌で叫んでゐるのが『打倒日本』であつた。自ら排日ビラを撒き自ら慘忍極る邦人殺害までなした中學生の暴擧によつて記者は新たな支那を認識せざるを得ない』

といひ『少くとも今後の日支交渉卽ち事件の直接交渉において犯人の逮捕とか排日の取締の如きは最早や問題でない』と感想をつけ加へてゐるが、これは何人も同感であらう。

田中國重大將を總裁とする明倫會では成都事件起るや急遽幹部總會を開いて根本對策を檢



討し、左の決議文をつくつて首相外相軍部兩相に提出して當局を激勵した。

『這般の成都における邦人の殺傷事件は慘虐無比、眞に皇國に對する重大の侮辱にして國民の憤激措く能はざる所、永遠にその禍根を一掃し、絕對にその再發を防止せざるべからず、抑も本件は單なる一地方の突發事件にあらずして支那政府及び國民黨の多年に亘る排日抗日政策の一產物なり、吾人は近隣に斯かる敵意を有する國家の存立を默止し得ざるを以て、此機において彼の中央政府をして斷然遠交近攻の陋策を一擲し、誠心誠意日支共存共榮、東洋平和確立の大理想に覺醒し、國民の敎育、黨部等の指導精神は勿論、その他百般の施政に亘り此方針を徹底し、且之を事實に實現せしざるべからず、帝國政府は速かに支那政府に對し强硬に右趣旨の實行を迫り、要求貫徹のため機を失せず適當なる要所の保障占領を斷行するを要す』

この決議文に現れた如き認識は、朝野何人も異存のないところ、我が外交當局に於ても、支那の以夷制夷式な歐米依存外交を止めしめ、排日抗日を一掃し、日滿支の共存共榮を以て東洋平和の礎にせんといふ對支原則は、再三中外に闡明してゐる。二・二六事件の後、

有田外相の就任となり、軍部と外務の改めて意見一致により確認せられたところも、此の對支原則に他ならない。外交專門の廣田を首相とし、駐支大使であつた有田を外相とし、陸軍に於ては多田中將を支那駐屯軍司令官とし喜多少將を駐支武官に轉補し、省部の要職にいづれも支那通の將校を据え、對支外交陣は茲に整備し右の原則に立ち行詰まれる日支國交の打開に乘り出さんとして、川越新駐支大使がやうやく任地についたと思ふ間もなく、言語同斷な成都事件は勃發したのである。我が對支原則は依然不動であるとしても、これが實行は客觀事情と相手の出方次第で如何樣にも變化する。廣田氏は前內閣に外相として、「予の在職中は戰爭はない」と議會に明言した。しかし當方は戰爭をせぬ積りでも、降りかゝる火の子は拂はずばなるまい。類燒の危險ある火元は消さねばならぬ。いつ迄も控手傍觀を許さなくなつたといふのが今日の事態である。明倫會の決議には、必要とあらば要地の保障占領を斷行せよとある。それも支那の出方一つでは已むを得ぬ仕儀であらう。

## 二、淵源深き排日運動

禍根は支那に於ける排日の彌漫にある。今回成都の排日暴行は、最近支那各地に頻出せる排日侮日行爲と無關聯のものでなく、同一の根に生へた枝梢に他ならぬ。その根といふのは、約言すれば國民黨で、中國々民黨が、禍根をなしてゐるのである。尤も、支那國民の排日運動は古い歷史をもつてゐる。支那は數千年の久しきに亘つて世界最古の歷史と文化を誇り亞細亞大陸に優越的地位を占めて來た結果、支那人は外國人をさへ見れば夷狄野蠻視して尊大振る習性に囚はれ、排外賤外的國民性をつくり上げるに至つた。だから、初め歐米帝國主義國家が支那に觸手を伸すや支那の排外思想は猛然としてこれに反擊したが如何にせん國力これと伴はず、今日まで幾度びか悲劇的應接をくり返した。それにも拘らず支那の排外思想は毫も改まず、列國の重壓は却つて支那人の腦裡に外國に對する憎惡猜疑心を植えつけ益々排外運動の病菌を培養する溫床となつたのである。

日本も亦歐米列國の例に洩れず、殊に日本は一葦帶水の隣接地位にある地理的關係から、政治經濟上支那との關係は密接で複雜であるだけ、排外運動の風當りが最も強く、清朝沒落後の最近廿五年間の重要なる排日問題だけでも屈指に暇がない。滿洲上海兩事變は正に支那積年の排日運動を清算すべき機會であつたが事實は却つて、長期不斷の潛行的な抵抗運動に轉換せしめる結果となつた。

しかも支那の排外運動は、歐洲大戰後の民族主義の刺戟、國民黨の三民主義によつて民族復興運動に轉化すると共に、國民黨の聯露容共策以來、共產主義の反帝國主義イデオロギーの浸潤するところとなつた。國民黨の出現までは、支那の排外運動は無組織で目的意識もなく、附和雷同的なものが大部分であつたが、國民黨が出現すると共に排外運動は組織的な目的々な運動に轉化した。蔣介石の國民革命軍が北伐に成功するや、國民政府の母體である國民黨遂行の手段として排外運動を積極的に指導し、民衆の排外運動を公許しのである。國民政府の政治的指導原理は周知の如く孫文の三民主義（民族、民權、民生）を根幹とし就中對外方針は、その民族主義に基き支那民族を解放して自由獨立たらしむべくこ



の目的達成のためとられた實行手段は、支那の國力、經濟組織等の客觀事情を顧みず一意支那を包圍する列强資本主義の政治的經濟的勢力を一切驅逐せんとする反帝國主義鬪爭であつた。現在もまた然うである。從つてその鋒鋒が、政治經濟上支那に最も優越的地位を占める日本に向けられたのは當然である。

國民黨及び其基礎上に立つ國民政府はこの排外方針の下に國民の凡ゆる部面に向つて排日思想を涵養、鼓吹し、排外手段を擴大强化するため學生、軍隊その他の團體に對して排日的教育訓練を施し、各地に排日團體を組織せしめた。この一般的排日準備工作の下に起つたのは、未だ吾人の記憶に殘つてゐる昭和三年の濟南事件を原因とする全國的の排日貨運動である。この運動の規模は從來見ぬ廣大なるもので、支那本土はもとよりシンガポール、蘭印、フイリッピン等における南洋華僑の活動する都市にまで波及する一方、國民黨員をも構成分子とする反日會を組織し、支那排外運動の特質たる一般的經濟斷行を以て挑戰し、官製排日を遺憾なく發揮した。滿洲事變が張學良の排日盲動から誘發されたことは周知の通りである。彼れは日本朝野の忠告を無視して國民政府の旗下に參じ國民政府の尻

押し下に無謀にも滿洲より日本を驅逐せんとしたのであつた。滿洲事變より上海事變にかけては、國民政府は全支各地に抗日救國會を結成して具體的經濟的絶交方法を詳細に規定し違反商民には苛酷な制裁を加へ運動の統制に異常な努力を傾けた。

更に看過し得ないのは、排日に暗躍する各種秘密結社の存在である。蔣介石の獨裁强化を目的とする各種の秘密結社が、排日に狂奔してゐる。今日一般にその存在を知られてゐる、此種秘密結社としては憲兵幹部團、復興社、勵志社、藍衣社、C・C團、青年國民黨、憲兵團等がある。これらは元來國民黨の反蔣派に對して、蔣介石を擁護し彼れの獨裁確立を目標として組織されたものであるが、また蔣介石の政策遂行の秘密武器である。滿洲上海事變後日本との正面衝突は到底勝味がないといふ事が判り、餘儀なく一面交渉一面抵抗の長期抗日策に轉換した以後の蔣介石にとつて、この秘密結社は一面抵抗の手段として重要な役割りを演じたのである。北支停戰地區内に於いて、彼らは得意の、中飛躍をなし、親日的行動者を監視威嚇した。かの滿洲テロ事件の如きは其一例である。最近廣東政府の沒落により蔣政權の地歩更らに鞏固を加へると共に、統一の餘勢を北支に驅らんとする必

然の勢となるに及ぶや、北支の天地頓に排日氣運の低迷を見るのも、これら秘密結社の潜行的活動に由るものと觀られてゐる。

次ぎに支那の排日運動と共産主義との關係も看過するを許さぬ。支那の民衆運動の先頭に立ち、その音頭をとるのは、いつも學生團であるが、學生團の背後に共産黨員の暗躍があることは公然の秘密である。元來國民黨の三民主義には多分に共産主義思想が含まれて居り、國民黨との腐れ縁は、蔣介石の北伐當時の聯露容共策によつて知られてゐる。其後共産黨とは絶縁したけれども、國民黨の内部に殘して行つた思想的影響は大きく、また中國共産黨が强力な共産軍を形成して第三インターナシタナルの指導下に各地の農村地方を押し廻り、ソヴエート地區を劃し、國民政府の討伐の不徹底、遷延のまにまに之ら地方農民の間に排外思想を吹き込み、排外運動を組織化した役割りは頗る大きい。

支那の排日運動、抗日思想は、實に上述の如くその由來する所が深く、且つ廣範圍に亘つてゐる、二十年前、世界大戰直後あたり、過激な排日教育を受けた當時の青少年は今や支那社會の中堅となりつゝある。而して今回成都の事件に見られた如く、今日の小學生中

學生等が、打倒日本に熱狂してゐるのである。排日は既に拔くべからざる支那の習性となつたといつて好い。この民衆に迎合し、この民衆の基礎の上に立つ政府は、益々排日を煽ることに依つてのみ、自己の存在を維持し得るのは謂ふまでない。政權を乘つ取らんとする者も、政權を維持せんとするものも、支那に於ては最早や排日を標傍せざるを得なくなつてゐるのである。蔣介石は排日を以て政權維持の手段として來た。今となつて排日を取消すことが、何を意味するかは問はずして明かであらう。而も日本はこれ以上排日の存續を許容し得ないところまで來た。

## 三、蔣の二重外交

蔣介石を何うするか、といふことは今日の對支態度決定の先決中心問題である。この問題が決らねば對支策は解決せぬ。ところが從來日本には、この重大問題に關して二つの見解が行はれて來た。一つは蔣政權を日本が支援し、蔣をして全支を統一せしめて後彼れと



提携すべしとするもの。その二は、蔣政權を打倒し、次の新興支那政權を相手とし、對支問題を解決すべしとするもの。これである。而してこの相反する二つの見解のよつて來るところは、支那の歷史及び現狀の認識の相違と、蔣政權の將來に對する見透しの相違に存する。

大體に於て外務省及び民間論者の大部分のとり來れる見解は、上述第一の見解、即ち蔣政權支援論である。彼らはいふ、「滿洲事變以來漸次蔣介石は日本の力を認識し、排日政策は結局彼れ自身にとり不利であることが判つたので、遂次親日政策に轉向しつゝある」と。この見解に對して、軍部內に大なる不滿があつたのは爭はれぬ事實である。支那公使館の大使館昇格に絡る軍部對外務のいきさつは、何人の記憶にもなほ新たなるところであらう。

滿洲事變以後、蔣政權の排日政策に變貌を來したのは事實である。排日全盛期は滿洲事變で終つた觀がある。そして次に現れ來たのは『一面交涉、一面抵抗』時代である。しかし此二重政策たるや、支那が形勢惡しと見た場合いつでも繰返された苦肉策であつて、一面交涉とは、抗日をカムフラジュする親日的ヂエスチユアールに過ぎない。日支經濟提携

といふ如き、如何にも支那が親日化したかの如く思はせて日本側に日支親善に對する一縷の望みを抱かせることに依り、日本國内の反蔣論の擡頭を豫防警戒せんとするものに他ならぬ。支那人は元來斯かる老獪なる外交上の手練手管に長けてゐる。袁世凱の政治的末期にあたり、日では反袁輿論が猛烈で、遂に袁世凱政權は崩壞の一路をたどつたこと、近くは張學良の失脚は、彼れの露骨正面的なる排日侮日政策に禍されたものである事を、蔣介石は餘りによく知つてゐる。されば彼れは、日本の反蔣輿論を豫防緩和する手段として、外交辭令的交渉を巧みに持ち出すことを忘れない。誠意の親日でなく僞瞞の親日ゼスチューである。

何故に蔣介石は誠意を以て日支提携に進まず『一面交渉、一面抵抗』の二重政策をとるのであるか。といはんより、何故に二重政策を執らざるを得ないのであるのか、要するに彼れの從來執り來れる國内政策のためである。

前節論ずる處の如く、蔣介石は排日政策を一枚看板として全支の政權分裂を取纏めて來た。即ち彼の立場は、今更ら排日政策を抛棄して親日に轉向し得ない立場にある。蔣にして今日、排日政策を抛棄せば、全支の反蔣勢力は一勢に蜂起し、蔣の力を以てしては全支を收拾し得ず、遂に蔣政權の崩壞を免れないであらう。

國民の排外心を激發して對外國策遂行の具とし、或はこれを内政上利害相反する黨派乃至勢力の打倒に利用することは世界各國共通の例であるが、蔣介石は北伐出發の當初から徹頭徹尾この手段に依賴して來たのである。これに對して反蔣勢力また排日を利用せんとし、排日風潮は多々益々支那民衆の間に激成彌漫するに至つたのである。蔣介石がはじめ露國の援助下に廣東から全支統一の大野望を抱いて立つや、支那の民衆、軍閥はあたかも乾いた砂の如き個人主義の集團であり、何等の結合力も融合性もない。是を相手として全支統一に乘り出した彼れの民衆收攬策は支那民衆に最も容れられ易い排日政策に他ならなかつた。即ち彼れは革命外交の旗幟を掲げて排日宣傳を行ひ、旅順大連の還付要求、日本の在支收益の奪還等を以て民衆に呼びかけ、愈々彼れが北伐成功して北京に乘り込んだ時の如きは『余は東京に向つて前進する……』とまで矯激な排日言辭を弄し、軍閥民衆の排日熱を煽りつゝ、功みに之をセメントとして支那統一の野望を進めて來た。最近廣東に於

ける反蔣運動の如きも、蔣の蒔いた反日熱を逆用して、抗日倒蔣を强調したのであるが、そこは拔目のない蔣介石である、廣東で多數の宣傳員を潜入せしめて排日を一層煽りつけ、一方では日本の西南支持を揑造宣傳して、遂に武力を用ひず廣東派征服の目的を達した。

蔣介石が乘し上るに伴ひ、反蔣運動は早くより生じて、蔣の獨裁政權下に雜軍と呼ばれ蔣直系のものと差別待遇受をけたる西南、廣東、揚子江筋の各政權の間には、反蔣氣運が年々昂じつゝあつたのである。これに脅威を感じた蔣介石は益々極端な排日手段を弄して民心の收攬につとめ、この結果遂に滿洲上海兩事變となり、遂に滿洲國獨立といふ如き蔣政權にとつては拭ふべからざる失敗を招いたのである。

流石老獪政治家の本領を失はぬ蔣は滿洲上海事變を巧みに利用し蔣政權の建直しを謀つた。即ち滿洲國獨立に至つた責を日本の帝國主義侵略に歸し、『日本卽敵』のスローガンを以つて徹底的排日の宣傳につとめ、對日非常時に國內分裂を來す如きことあれば、支那自ら墓穴を掘るものなりとして、全支一致日本に當れの運動を煽つた。斯くて各地の反蔣運動は暫く鎭靜に歸し、蔣政權建直は一時的にもせよ成功を見たのであるが、老獪なる蔣介



石は例の一面交渉一面抵抗策により、日本に對しては反日の事實を親日のカムフラジュで僞裝することを忘れなかつたのである。彼としては日本の駐支官憲への義理立てから、日本人と同席する會合に於て、極めて親日的な意見を發表して居る、殊にそれが外交官を對象とする場合、この傾向が判然としてゐる。この親日態度が假面であることは勿論だが、蔣としては假面の親日が眞實化することを極度に惧れてゐる。假面の親日意見を發表する結果として、當然そこに親日空氣が醸成されるのは已むを得ない。斯くて漸次親日に轉向し來れる政客、商人、軍閥の日本との接近は、蔣政權にとつて惧るべき存在たるは言ふまでもない。蔣は如何にして裏面に於いて親日轉向派の日本接近を阻害するか、親日空氣の一掃を圖るか、それは北支停戰協定以後最近に至るまで、親日派に對する藍衣社、憲兵團、國民黨の暴壓となつて現れたのである。裏面の直接行動的排日運動は蔣の使嗾の下に行はれ、天津におけるテロ、上海における暗殺となつた。北支停戰協定後、黃郛の手によつて、日支の問題の解決は何等の曙光を認めるに至らず、北支を暗澹ならしめたものは此の陰險なる排日策動の存立したためである。停戰協定には『排日を嚴に取締る』といふ事を言明

してある。然るに少しもそれは實行されなかつた。假りにそれが實行され排日の魔手が取締られるならば、山西の閻錫山、山東の韓復榘、西南の陳齋棠、湖西の李宗仁、雲南の龍雲、並に揚子江筋の所謂雜軍等の中には、或は個々に日本と提携し蔣政權から離反したものがあるかも知れない。蔣はこれら各地の政權の日本接近を惧れるがため、藍衣社、憲兵團等々の秘密結社の手を以て排日策謀を行はせたのである。

排日政策を拋棄することは、蔣政權に致命傷を與ふることである。蔣介石をして徹底的に排日を取締らせることは、蔣自身に致命的痛手を與へることである。蔣政權に對して排日の徹底的取締りを要請することは蔣中心の支那統一を蔣自身の手により破壞せよと要請するが如きものである。即ち日本政府が南京政府に對して排日取締り徹底を要請することは、恰も木に據つて魚を求むる類である。

然るに蔣政權の存立に對する認識を誤れる結果は、蔣の一面交渉の親日僞裝にたぶらかされ、蔣によつて眞の日支親善が實現され得るかの如き錯覺を抱かしめるに至つた。南京政府を辛抱づよく善導するならば、支那をして眞の親日にまで導き得ると誤信し、蔣の御機嫌とりに腐心し、時期尚早の大使館昇格を急施したことなどが、支那人を一層つけ上らせる結果となつたのである。

## 四、赤化と抗日の合作

日本の對支問題は、相手は單に支那だけと思ふならば大なる誤りである。對支問題は同時に對蘇問題であり、對英問題であり、對米問題である。日本の對世界交渉線は、悉く支那に於いて交錯してゐることを忘れてはならない。日本を包圍する各國の攻擊線は、支那大陸を通じて準備せられつゝある事を看過してはならないのである。

先づ蘇聯を見よ。蘇聯は支那を對日戰線に共同せしめることに躍起となつてゐる。而してその實際工作は、着々として進捗しつゝあるのである。蘇聯の支那抱え込み政策は、モスコーに於ける昨夏の第七回國際共產黨大會（コミンテルン大會）の決議により新プログラムを定められたもので、即ち抗日のため支那共產黨並に支那共產軍を、一切のいきがゝ

りを捨てて、反蔣、反南京運動をも中止して、ひたすら抗日に共同せしめんとするものであつた。蘇聯のこの工作は何處まで成功したか。これを事實について見るに、支那共產軍と蔣介石軍との間には最近全く休戰狀態が續いて居る。また南京政府は否定したけれども、何處よりともなく露支密約が行はれ、世界の話題となつてゐる。更らに具體的なことを云ふならば、昨年十二月全國大學生救國聯合會が結成され、次いで同月中に全國中等學生救國聯合會が結成され、更に本年一月に入つては全國小國校教員救國聯合會が結成されて、全支に於ける學生層が抗日闘爭のため先づ蘇聯の提議に呼應して立つたのである。

更らに駐蘇大使ボゴロモフを主とする蘇聯要人の活躍は政治界に及び、今や全支の政治團體は殆ど悉くこれに參加して、全國各界救國聯合會を結成し（國民黨は表面參加しないがその攝成分子たる蔣直系の秘密結社、C・C團、藍衣社の主要人物はみな參加してゐる）また文化團體に對する暗躍も成功して、全國文化界各界救國聯合會が結成され、支那全國の統一的抗日戰線がこゝに出現したのである。これらの各救國聯合會は、別に國難救國社なる實行機關を設けて、これが以外に豐富な資金を擁し、多數の宣傳員を各地に派遣し、主として學生、勞働者、農民に抗日を宣傳教育し、ひたすら機會の到來を待機してゐるのである。彼らは得々として揚言してゐる、「今度の抗日闘爭こそ從來のやうな空鐵砲ではない、愈々立つときは必ず必殺を射る」と。

支那は何故に斯くの如く蘇聯の使嗾に乘るか。それは單に蘇聯の策動ばかりでなく、蘇聯を利用して日本の支那進出を牽制せんとする英米の老獪なる暗躍も働いてゐるのである。支那人の排外思想は歷史的に古いものであるが、日本が特に地理的に支那と近接し關係密接であるに加へて、英米蘇の諸國が巧妙に外交的經濟或は思想的の術策を操つて、支那人の排外氣勢を日本に集中するやうに仕向けたのである。滿洲上海兩事變及び北支問題はこの策謀に更に絕好の機會を與へ、全國的の排日運動を一層深刻化し積極化したのである。

事こゝに至らしめたのは、日本の外交の拙劣不統一にもよつたのであるが、同時に支那の知識階級、指導階級の歐米依存主義に因由する。蔣介石はじめ支那人の殆どすべては、目前現實の利害にひかれる現實主義者である。日本人の理想主義的な道義の主張は彼らの理解を得ず、歐米の提示する目前の好餌にのみ誘惑されるのである。而も支那人の腦裡に

は、歐米を先進國と信ずる反面、昔は支那文化の餘澤を以て發達した島國日本を輕侮する心が殘つて居り、反感もある。日本人が如何に威張つてもあんなちつぽけな島國で何が出來るかと云ふ氣がある。人口多く國土大なる支那が一致團結したら日本などは鎧袖一觸だといふ氣がある。彼等は事大主義であり、日本認識を誤つてゐる。

故に日本が少しでも歐米に屈從する如き樣子を見取ると、彼らは忽ち日本くみし易しとなし、排日攻勢をとるのである。華盛頓會議に於て日本が英米に壓迫さるゝ狀を示し、五對三の海軍條約を結ぶや支那は對支廿一ヶ條の拒否のみならず旅順大連の回收までも唱へ出した。降つて昭和五年の倫敦海軍會議に於て日本が又もや對英米五對三の比率であるとし、暴戾なる張學良の排日侮日行爲を增長したのである。この根性は今なほ改まつては居らぬ。彼らの日蘇觀はそれを物語つてゐる。

日蘇戰は何れが勝つか。これに對する支那人の答は概ね、蘇聯が勝つといふのである。其の理由の一は、單に蘇聯の優勢を信ずるもので、何故かく信ずるかといへば、主として現今支那に於ける中國共產黨の宣傳並にパンフレット（それらのパンフレットは如何にも巧妙に、日蘇兩國の兵力經濟力を比較して蘇聯の優勢を推論してゐる）の敎育によるのであつて、此れを鵜呑みに信じてゐる。又他のものは他の理由から、日本は敗けると信じてゐる。それは、日蘇開戰すれば、日本は一時勝利を得るかも知れないが、しかし勝つてもバイカル以西へは進擊することが出來ない、バイカルは愚かウラルを越えなければ、蘇聯は敗れても直ちに降服はしないであらう。結局持久戰となるが、持久戰となれば歐米の經濟援助なき日本は、遂に敗戰疲弊して和を乞ふの餘儀なきに至るだらうといふのである。現今支那の知識階級、指導階級中には斯く信じてゐるものが多く、蘇聯と握手して日蘇戰爭の機會を狙つて失地回復を圖らんとする心理がそこに動いてゐるのである。

蘇聯も亦、自己の優勢を支那に誇示するに汲々たるものがあつて、例へば滿蘇國境に紛爭が起れば、モスコー電報は、蘇聯兵或は蒙古兵が日本の越境兵を全滅せしめたりなどと、馬鹿げた宣傳をし、支那紙はまたモスコー電報のみを揭載して日滿側の電報を默殺し、蘇聯の對支宣傳に呼應してゐる。

支那は滿洲國獨立を以て日本の侵略なりとし、失地回復を叫んでゐるけれども、內蒙新

疆に對しては何うであるか。內蒙は旣に久しく赤軍の占據するところとなり、ソヴェート政體布かれ政治經濟軍事一切は蘇聯の掌中に握られ、最近には周知の如く蘇蒙攻守同盟の公表があつた。同盟密約は蒙古に對し少くとも宗主權を有する筈の支那政府に對し何等の交涉も諒解もなく祕密裡に蘇蒙間に取結ばれ、後日に至り突如として之れを正式化し公表したのである。支那は之に對して如何なる態度をとつたか。只だ僅かに申譯けばかりの抗議を提出したのみで、排露運動も外蒙の失地回復運動も起らなかつたのである。

同樣のことは英國に對する支那の態度にも見られる。英國は昨年ビルマから、突如として支那雲南省の卡瓦地方十七王地に千數百の軍隊を以て越境し來り、無斷に兵營を建築し、熔鑛爐を築いて、鑛產資源を占有してしまつたのである。卡瓦十七王は幾度かこれを南京政府に訴へたが、南京政府は何等の手段もとらず、遂に右十七王は血涙を以て『中國同胞に訴ふる書』を綴り英國の暴逆ぶりを縷述して國民に訴へたが、何等の反響もなく雲烟過眼視せられてゐる。

## 五、英國の裏面策動

支那を繞る英國と蘇聯の關係は微妙を極めてゐる。中央亞細亞に於ける英露の抗爭は十九世紀時代より繼續されてゐる。日露戰後の英露協約、世界大戰中の露西亞革命によつて一時この抗爭は中止されたが、蘇聯出現後レーニンの遺策たる『世界の革命は東方に於て決す』に據る赤化工作はスターリンの五ヶ年計畫によつて一層具體化し來れる觀がある。その第一着がトルク・シブ鐵道の建設で、これが爲めトルキスタン地方の產業開發は驚嘆すべき發達を見るに至つた。ロマフフ時代の外交工作は蘇聯時代となつても變ることなく、對歐對亞の兩刀使では常に彼れの得意とするところであるが、その東方政策を擴大强化するためには、何としても重點を中央亞細亞に置かねばならない。それは滿洲國の出現によつて極東より退却を餘儀なくされた現下の事情に於いては、一層然りといふべきである。而して蘇聯の中亞政策は、中亞に住む四千萬回教徒の上に施され、更にそれを伊犂新疆地

方に擴延しつゝある以上、新疆と境を接する西藏の上に、英國が異常の重壓を感ずるのは當然であり、また第三インタの赤化工作が一方は新疆甘肅、陝西に通じ、他方は四川より南下して貴州雲南を侵さんとするに對しては、英國としては相當な脅威を感じたのである。英國が突如として昨年兵を雲南に入れ、鑛山を占據したのも、その眞意は蘇聯の進出に對し防壁を築くにあつた。最近英國がその對支活動の中心を上海より香港に移し、奥漢鐵道の完成と相俟つて、南方支那への經倫を新たにせんとしてゐるのは、華府條約廢棄後の對日姿勢を整へるものでなくて何であらう。

英國は斯く南支中亞方面に於て自己の地歩面强化する一方、極東方面に於ては蘇聯を操縱し日本の支那進出を牽制せんとしてゐる。本年三月初め新聞は突如、英蘭銀行が佛國々民銀行の保證の下に佛政府に四千萬磅の借款をあたへたといふ倫敦電報を報道した。然るに旬日を出でずして、今度は佛國政府が右四千萬磅を更らに蘇聯に貸し與へた旨を報じたのである。これは何うしても、英國が佛國を通して蘇聯に借款を與へたものとしか解されぬ。この四千磅は蘇聯に於て如何に使用されたか。專ら傳ふる所では次の通りである。四千萬磅のうち二千萬磅は蘇聯の極東軍備に、一千萬磅は對獨軍備に、殘る一千萬磅は蘇聯の國内整備費、並に支那に於ける活動費、殊に支那共産軍を、新疆、甘肅、陝西に跨る一角に特別地區を設定する費用に充てらるゝものであると云ふのである。

英國は昨年來、支那に對する積極的の財政援助に乘り出し、例のリースロス氏の活躍によつて、二千萬元の幣制改革資金の借款が成立した。英國は何故に斯かる好意を支那に示すか蘇聯の有名な評論家カントロウイッチはこれを左の如く評してゐる。

「英國の對支政策の最近の目的は、一は支那に於ける英國の陣地を鞏固にするため、一は直接日本から脅威される支那の半植民地の現狀を維持するためである。この二つの目的の最短經路として、專ら國際財政援助を使用してゐるのである。一九三五年春英國政府が提出して支那の承認を得た國際借款草案に依つて、其の財政と幣制を改革した如きは此方針より出でたものである。その目的の第一は南京政府を鞏固にし、甚しきは都合によつて其の反日性を强化せんとするにあり、第二は支那に對する國際管理を强化し、日本方面の獨占に對抗しようとするにある。この英國の提議は適切に之を言へば、米國の新戰術の成

功の端初を示すものだ。米國戰術は、英國を推して對日闘爭の最前線に立たせようといふに在る。」

「英國の借款計畫と支那の貨幣改革とは、論ずるまでもなく孰れも支那をして、改めて英帝國主義に依賴することを強化せしめる手段であつて、日本の地位と日本の監督とを削ぎ、且つ弱め、英國の地位と英國或は國際の監督を鞏固にするにある。」

支那は列强魔手の躍る舞臺である。日本の對支策は、單に支那のみが相手ではない。この點の認識の不明確なることが、少なからず我が霞ヶ關外交を誤らしたのである。

十二年前、華府會議でクレマンソーが『支那とは何ぞや』と叫んだのは有名な言葉である。支那とは何ぞや支那は近代的國家たるの實體を具備してゐない。それは滿洲事變に關する國際聯盟會議に於て我が代表部の主張した所でもある。從來支那なる地域的名稱はあつても、統一ある國家としての支那は存在しなかつた。主權あり、土地あり、人民も存在するけれど、その主權は頗る不完全な主權に過ぎず、事實は利權の分捕りと貿易の搾取により、列國の半植民地と化してゐる。南京政府は列國の承認を得て獨立國の體裁は整へてゐるが、政治的にも經濟的にも獨立の實全からず、列國勢力の角逐場となつてゐるのである。



對支外交は此事實を正視しなければならぬ。フイリッピンや蘭領印度に對する外交が、その地方政府のみを相手としたならば失敗するに決つてゐる。フイリッピンに對するには、米國の支配を考慮しなければならず、蘭印に對しては和蘭はもとより、英國をすら考慮しなければならぬ。況んや支那は一國の排他的獨占支配下にあるものでなく、列强帝國主義角逐場であり、日本と共に英、米、蘇の三國は特に支配的威力を振つてゐる。一國の植民地に對する場合すら、その本國を主たる對象としなければならぬとしたならば、かゝる國際狀勢下にある支那に對しては、これら列國の對支政策を十分に考慮しなければならないのである。

霞ヶ關外交はこの平凡な眞理を忘却無視した。時に英國と提携してその番犬となつたり、英露の對立に漁夫の利を占めようとしたり、消極受動的の行動はあつたが、彼らの對支方針を審らかにして我國策の基本を確立し、以て支那國民を誘導するやうな雄大な外交國策

は考慮されなかつたのである。この誤りを正せるものは即ち、滿洲事變以後における我軍部イデオロギーにより推進されたる自由積極外交であり、歐米依存排擊、赤化共同防止、排日一掃日支親善により東洋平和の安定の礎石たらしめんとする大亞細亞主義對支外交である。

## 六、暗躍する列强の魔手

現在支那における國際的な動きは大體四色に區別し得る。

一は支那自體の御都合主義に依つて、以夷制夷策をとり、各國を相爭はしめて、結局各々の支那に有する地位、利權を失はしめ、其の間、外國資本によつて支那自體の軍備强化、財政整備、產業發達等をはかり、即ち他力を巧妙に利用して自體の更生を遂げんとするもので、蔣介石はじめ大體の支那人の狙つてゐるところは之れである。但し蔣介石は此の外に、國內統一を目指してゐる。各國を利用して自己の國內統一野望を達成しようとしてゐる。

第二は英米を中心とする共同管理、並に共管に事寄せる英米ブロックの完成への動きであり、第三は蘇聯が支那國民運動の假面の下に、自己と氣脈を通ずる支那要人をして南京政府を乘取らしめ、赤色帝國主義侵略を企圖せるもの。第四は日本が東洋安定の實勢力なることを支那並に世界に認識せしめ、眞に共存共榮の下に、支那をして日本と眞の提携せしめんとする日本の働きである。

第一の、支那自體の更生は、今のところ到底望み得べからざるもので、而も各國を利用するといふものゝ、蔣が各國を利用せんとすれば、各國も支那を利用せんとすべく、一方的な利用といふことは有り得ないのである。寧ろそれは老獪にして實力を有する歐米の支那への勢力挾植、共同管理への道を深くする結果となる。蘇聯の利用は抗日政策上巧妙の如くであるが、實は赤化の魔手を自己の內懷へ引き入れるものであつて、將來惧るべき東洋の禍根たるは火を睹るよりも明かである。支那の蘇聯引入れ、英米の支那共管は日本の斷じて承認し得ざるところである。

却説、蔣介石の現今の意圖は、前述したやうに國內統一と軍備の強化である。蘇聯との妥協による支那共產黨、共產軍との對日共同工作も、彼れの此の目的に出でてゐる。何故なれば共產黨、共產軍との妥協は、國內統一の一工作となり、共產軍（現今は蔣介石との妥協によつて抗日救國軍と呼ばれてゐる）に對する討伐の手數と費用を省き得ると同時に、對日工作に利用し得るといふ、一石二鳥的の效果を、現實主義の彼れは狙つたのである。又軍備强化については英米財閥、殊に世界の武器製造業者たる猶太財閥との提携に依つて、どし〳〵之を遂行してゐる。現今上海には每日の如く海外より新式兵器が陸揚げされつゝあり、南京の大ホテル、メトロポールの八割は、歐米武器賣込商人で埋つてゐる。彼は現今六十箇師團のうち四十箇師團を機械化武裝せんとして居るといはれる。この近代的裝備は國內統一のためであるか將又抗日準備であるか、蔣介石のみがその祕密を知つてゐる。

排日を以て立てる歐米位存の國民黨を政治的基礎とし、英米の資本と完全に連繫せる浙江財閥を經濟的基礎とする蔣介石政府に、眞の親日を求めるのは、求める者の認識不足である。彼れに親日的態度があるとすれば、それは英米の默諾する範圍に於てであり、當面



僞裝のためである。

## 七、北支を操る蔣介石

昭和八年五月卅一日、塘活停戰協定が締結され、滿洲事變以來實質的の戰時關係にあつた日支兩國が休戰狀態に入つた。黃郛政權によつて停戰協定をはじめ通車問題、設關問題、通郵問題等の重要懸案が解決され、北支と滿洲の通路が開かれた。蔣政權の所謂一面交涉の實が擧つたわけであるが、日本が滿足する如き懸案の解決をなすには、黃郛政權は餘りに弱體であつた。即ち北支にはなほ中央軍、黨部等が混入し、張學良の殘兵たる于學忠の軍隊等が蠢動してゐて、一面抵抗の潛伏的活動が擡頭して來たため、遂に停戰協定違反によつて再び形勢は險惡となつた。玆に於てか生れたのが南京政府の北支に於ける公私各機關の撤退である。之が梅津河應欽協定である。この協定を契機に、北支における自治運動が勃然と起り、種々曲折を經て今日の如き冀察政務委員會が生れるに至つた。冀察政務委

員會はその下に河北省と察哈爾省を含み、而して滿洲國に接した停戰協定區域の部分には、冀東政府がある。日本は此の北支こそ、排日策動なき明朗地方たらしめ、日滿支の眞の提携を實現せしめんと種々腐心してゐるのであるが、日本の希望は容易に達せられない。それは冀察政權がなほ不安定であり、鵺的態度を脱せぬからである。

北支の自治運動は、日本の使嗾によつて起つたものでなく、多年南京政府と地方軍閥とから二重搾取を受け、困憊疲弊に陷つてゐた民衆が、南京政府の各機關と軍閥の重壓が撤去されたのを機として猛然蹶起したのであるから、南京政府の支配下にあることを喜ばぬのは勿論で、一日も速かに明朗なる獨立した政治に浴しようと欲してゐる。ところが南京政府は斯かる關係を「日本は北支を中國から割斷し獨立せしめんとしてゐる」とし、日本に領土的野心があるかの如く宣傳放送し、之に動かさるゝものが少くない。併し日本は北支をもつて日滿兩國の平和を確保すべき鞏固たる安定地帶たらしめる念願より外、何等の野心もあらう筈はない。

北支自治運動は、はじめ河北、山西、山東、察哈爾、綏遠の五省に自治聯盟が出來るやうな形勢があつた。それが蔣介石の壓迫策動によつてものに成らず、河北と察哈爾二省だけの冀察政權の出現を見ることとなつたのである。その冀察政權――冀察政務委員會に對しても、これが安定せる政權となることを蔣介石は極力妨害牽制して居るのである。此の政權をなるべく弱體の、中間的なものにして置かうといふのである。即ち北支政權の特殊性をなるべく薄めて、蔣介石の把握下に置かうといふのである。この術策が有效に利いてゐるので、冀察政權はいつ迄も安定しない。

冀察政權弱化のため蔣介石がとつてゐる苦肉の策は、北支を包圍する外廓地帶の强力な中央化である。即ち梅津何應欽協定によつて河北省には蔣介石の軍隊、その他南京政府の直接の政治機關が入れられない。從つて直接に冀察政權に對し手を加へることは出來ぬ。外廓から恫喝壓迫するより他にないのである。その爲めに撰ばれたのが、山西と河南、江蘇の北境地方である。江蘇の北境一帶には、北平から追出された中央軍が蝮のやうな眼で北平を睨んでゐる。

河南の洛陽は、蔣介石の北方軍事の中心地で、この一帶には平常から多數の軍隊が集中

してゐる。山西省に於いては、蔣介石は共産軍と通謀してうま〳〵之を手に入れた。即ち先づ共産軍を山西省内に移動進出せしめ、之を討伐するといふ口實で中央軍を山西省に入れ、閻錫山多年の山西モンロー主義を叩き壞して、山西省の中央化を圖つてしまつた。

これらの北支を包圍する中央軍は、敢て北支に挑戰するわけではないが、これだけの中央の威力が北支の外廓を包圍してゐるといふことは、冀察政權を組織する宋哲元以下の要人や、冀察政權に不卽不離の態度をとつてゐる山東の韓復榘や、綏遠の傅作儀に如何なる影響を與へてゐるか、冀察政權が南京政權と絶緣し得ず、常に蔣介石に操られてゐる卽因の一つは玆にある。

また冀察政權の根幹をなす宋哲元の軍隊に對して、蔣介石の策動は有效に働いてゐる。昨夏蔣介石は完全に馮玉祥を抱き込んでしまつた。現在一兵をも私兵をもたない馮玉祥ではあるが、昔の緣故關係から意外に大きな勢力を北方軍閥にもつて居たのである。宋哲元の軍隊は勿論、山東の韓復榘の軍隊の旅團長、聯隊長級は、大部分馮玉祥全盛當時の少壯將校だつたのである。彼等は今でも往年のクリスチヤン・ゼネラル、馮玉祥將軍を敬慕してゐる。その馮玉祥が今や中央にあつて、將介石と腕を組み、盛んに抗日を唱へてゐるのである。また馮玉祥を通じて、蔣介石の意圖が、北支軍隊に及んでゐる。この狀勢では、宋哲元個人が如何に頑張つても、北支政權を南京から特立化することは出來ない。

蔣介石はまた、北支の學生運動を使嗾することに依つて、宋哲元を牽制してゐる。支那に於けるナショナリズム運動の先端を行くものは學生運動である。北平に方ける排日運動は、いつも男女學生が先頭となり、主體ともなつて騷動を起してゐる。これら青年の排日運動は、單なる政治家の策動にのみ依るとは見られなくなつた。國民黨十年の訓練を經て、今やこれらの排外運動は民衆自體の愛國心の發動によるものと見られるやうになつたのである。この點が宋哲元はじめ北支政權の組織者を精神的に強く支配してゐる。寧國奴の汚名を被ることが、彼らには何よりも恐ろしいのである。この關係を蔣介石は洞察し、北支に於て常に學生運動を起さしめて、冀察政權を牽制してゐるのである。北支の明朗化、日滿支三國の安定地帶の建設は、斯くの如くして蔣介石の策動が存在する限り到底達成され相もない。

# 八、排日一掃へ

我國の對支外交の根本策は、日支親善を實現し東洋永遠の平和を確立するにあるのは今更ら始つたことでない。だがその目的遂行の方針については、滿洲事變以來、軍部の主動推進力に依り霞ヶ關外交に一大變革が來たのである。それまで我の霞ヶ關の對支外交は、歐米追隨の外交であつた。その爲めに支那からは馬鹿にされ、歐米勢力を恃む排日侮日の增長となり、歐米勢力の支那侵入を許すことに依つて、東亞平和の禍根を深くしたのである。英米兩國の支那に對する態度は、帝國主義的搾取の對象として、即ち一の植民地として臨んでゐのは云ふまでもない。敢て領土を臨むことはしないが、運輸交通機關の設定から、資源を開發してその資本主義的欲望を滿足せしめ、一面支那民衆を消費者とすることに依つて、自國製品の市場擴太を圖つて來た。兩國の對行動は種々なる變形、擬裝はあるが、終始この範圍を出でない。産業開發を唱へ、支那經濟の發展向上を說き、財政援助を



試み、時には文化事業や宗教教化事業までも支那に於て行つてゐるのは、すべては帝國主義的搾取の一翼に過ぎぬ。既に彼らの目的はそこにあるから、彼等の行爲が支那の內亂を助長し、軍閥の野望を援けることとなつても、彼らにとつては顧るところではないのである。斯くの如く支那をして列國勢力の相爭ふ鬪爭舞臺たらしめ、永久に危を胎む半植民地狀態に置くことは、日本の最も迷惑とする所である。東亞の平和は、日本と支那の分擔によつて始めて可能である。而も今日の支那は、この役割りを分擔するよりも平和を攪亂する狀態にある。これを正道に導かんとするのは日本の熱望であつて、それが爲めには、支那に對する歐米の無責任なる干涉を阻止しなければならぬ。これ日本の新外交方針が、支那の歐米依存排擊を原則とする所以である。

支那はまた、蘇聯の赤化の魔手に攪亂されんとしてゐる。蔣介石の目前的現實主義の蘇聯利用政策は、却つてミイラ取りがミイラとなる危險を胎んでゐるのである。これ日本が支那に對して防共を要求する所以である。

滿洲國は必然の過程により既に嚴然成立したる獨立國である。支那が此の滿洲國を承認

せぬ限り、日支の間に最後的の平和はあり得ない。滿洲國に對する治安攪亂を絶對許容し得ないと共に、滿洲國の承認を支那に求める。これも我が對支外交の原則的要求である。

東亞の平和は斯くして、日滿支三國の提携の上に成りたたねばならぬ。日滿支の經濟ブロックを强化し、三國民衆の經濟提携を發展せしめて、共存共榮の實を擧げねばならぬ。經濟提携は日滿と北支間に於て、今や多大の意氣込を以て進められてゐるが、これは北支に止めらるべきものでなく、全支に及ぼさるべきものである。

これらの東亞平和確立の原則は、支那に於て排日が行はれる限り、到底實現不可能である。日本が如何に善意の躍起になつても、支那の中央政府たる蔣介石政權が排日抗日を方針とし、同政權の母胎たる國民黨が排日要人等によつて占據され、黨部の排日機關が全支各地に配置され、國民の排日訓練を行ひ、排日祕密結社を庇護し、官許排日抗日團體を組織せしめて居る現狀では、日本の理想主義的要望は遂に實現不可能である。

滿洲事變以來、軍部の主動推進力により急速に展開せられて來た對支外交は、否が應でも以上の結論を明確に認識せざるを得なくなつたのである。成都事件に引續く北海事件は、排日の惡夢より支那を覺醒せしむることの緊切なるを一層痛感せしめた。排日一掃への日本の決意は更らに硬化した。日本外交の背後に嚴存する、一貫不動の軍部の大方針は愈々逞しき姿を以て、世界の面前に浮き出して來たのである。

（完）

## 會員募集

◆本社は新聞では知り盡せない時事問題を最も正確に批判解説し、又、最も興味深い事件其の他今日の智識として必要缺くべからざる問題を順次パンフレットの形式で發行致して居ります。

◆會員には毎月平均パンフレット三冊以上を御送り致します。會費は一ケ年三圓です。便宜の方法で御送りドさる樣願ひます。

◆會員には本社發行のリーフレット「モンペール」を無代進呈致します。

◆會員中著述、出版等御希望の方は教材社事業部に御相談下さい。

◆會員の方には教材社の新刊書の通知を致します

◆申込所東京市小石川區西丸町九　教材社パンフレット係。


支那の排日を軍部は何うするか

定價十錢
送料二錢

昭和十一年九月廿八日　印刷
昭和十一年十月　一日　發行

著者　尾張速日
東京市小石川區西丸町九番地

發行人　池田弘次
東京市小石川區戸崎町六九番池

印刷所　中橋印刷所
東京市小石川區四丸町九番地

發行所　教材社
振替東京・五六一四三番
電話大塚(83)二〇三八番

大取次店　東京・森田書房・啓德社
大阪・新正堂書店・名古屋川瀬書店・九州菊竹金文堂

東京鐵道局公認
鐵道各驛ホーム・スタンド一手販賣　鐵道保養會

339
938